

ごあいさつ

太平洋島嶼国メディア関係者招聘事業も今回で7回目を迎えることができました。合計すると50名以上の太平洋のジャーナリストが日本を訪れたこととなります。島嶼国のメディアは、各社限られたスタッフが取材、撮影、校正、編集、企画と全てを一人でこなしています。

太平洋は地球の3分の1を占める広い地域ですが、そこに点在する島々から延べ50人の記者が来日し日本を経験したことは大きな意味を持つのではないのでしょうか。

民間財団として臨機応変に事業に対応できる特性を生かし、同地域のメディア組織Pacific Islands News Associationとの共同事業を展開してきました。政府では対応できない地域のワリス・フツナやニウエなどからも参加を得ることができました。さらに、日本の離島、奄美大島、宮古島、石垣島の記者クラブの協力を得てユニークな取材プログラムを組むこともできました。

同事業の2000年以降の展開については、事業パートナーであるPacific Islands News Associationの会長William Parkinson氏と事務局長Nina Ratulele氏をこの2月に日本にお招きし、協議しました。そして、この事業のさらなる継続と、とりわけ日本の離島、特に沖縄のメディア関係者との交流に重点を置くことで意見の一致をみました。

二人の来日を機会に「太平洋の報道の自由」について講演会を開催しました。なお、同講演会は太平洋学会の中島洋専務理事のご協力を得て、多数の日本のメディア関係者の方々にお集まりいただくことができました。島嶼という小国における既存の権力と旧宗主国の残っていたシステム、さらに昨今のグローバル化の波や民主化の動きに地域のメディアがいかに戦っているか、興味深い事例が紹介されました。今後、グローバル化が進む中で小国がいかに生きて行くのか。太平洋の島々でそれぞれのメディアが負う役割は大きいことが強調されました。

本事業が太平洋島嶼国と日本の人々の相互理解・相互交流に有効に生かされるべく、今後とも皆様のご協力、ご理解をいただきますようお願い申し上げます。

1999年3月吉日

笹川太平洋島嶼国基金

運営委員 歌川 令三

長期招聘プログラム

参加者（1名）	ロバート・マタウ、副編集長、フィジーデイリーポスト（フィジー共和国）
滞在期間	98年10月1日(木)～10月12日(月)
プログラムの主目的	日本と太平洋島嶼国の関係を多角的に取材し、レポート記事を所属報道機関にて掲載し、かつPINAの各加盟社にも転載可能記事として配信する。
滞在スケジュール	10月1日(木) 来日 10月2日(金) 歓迎昼食会 取材日程に関するブリーフィング 笹川平和財団表敬訪問 10月3日(土) 太平洋学会主催シンポジウム「太平洋の温暖化対策」 （ゲスト・スピーカーとして参加） 岡島成行・読売新聞解説部次長へインタビュー 10月4日(日) フィジー留学生とのインタビューおよび懇親会 参加者: Ruby Ah Yuk, Leone Karawalevu, Arnold Ashish Kumar 自由取材 10月5日(月) 中古車輸出業者の山銀通商（株）訪問 島嶼国への中古車輸出について同社社長へインタビュー サントリー・ラグビー部訪問 フィジーの選手へインタビュー 10月6日(火) 太平洋学会訪問 中島洋専務理事へインタビュー フィジー大使館表敬訪問（大使と昼食会） 自由取材 10月7日(水) 小浜島へ移動（石垣島経由） 平田大一氏が進める「鳥起こし運動」を取材 10月8日(木) 小浜島視察 石垣島へ移動 10月9日(金) 石垣島視察 10月10日(土) 笹川平和財団・太平洋島嶼国基金主催の第2回「やしの実大学」in 八重山パネルディスカッションへゲスト・スピーカーとして参加 10月11日(日) 東京へ移動 都内散策（銀座、秋葉原、アメ横） 10月12日(月) 都庁訪問 佐藤裕彦都議会議員へインタビュー 帰国

短期招聘プログラム

参加者（3名）	ジェリー・ジヌア、シニア・ジャーナリスト、EM-TVテレビ（パプアニューギニア） ジョン・ハスマイ、シニア・ジャーナリスト、ヤップ・ニュース（ミクロネシア連邦） ジャン・リュック・ダビッド、編集局長、テフェヌア・フォウ（ワリス・フツナ）
滞在期間	98年9月24日(木)～10月1日(木)
プログラムの主目的	経済大国・日本といったイメージ以外の日本を体験してもらい、日本の地域メディアとの交流を通じて日本に対する理解を深める。
滞在スケジュール	9月24日(木) 来日 9月25日(金) 太平洋諸島センター訪問、小滝義昭所長ヘインタビュー 都内散策（銀座） エコ・クラブ訪問、高野孝子代表ヘインタビュー 歓迎夕食会 9月26日(土) 築地魚市場見学 自由取材 9月27日(日) 宮古島へ移動 歓迎夕食会 9月28日(月) 平良市長表敬訪問 島内視察 風力発電システム、太陽光発電システム、太陽熱スター リング発電システム、および地下ダム工事現場見学 一般家庭訪問 9月29日(火) 平良中学校にてフォーラム 宮古島上水道企業団訪問 平良市栽培漁業センター訪問 マンゴー農家訪問 宮古毎日新聞社ならびに宮古テレビ訪問 メディア・ボランティア交流会 9月30日(水) 那覇・羽田経由にて成田へ 1名帰国 10月1日(木) 残り2名帰国

派遣事業（ヤップ島取材旅行）

参加者（3名）	川浦 克彦（宮古新報記者） 砂川 健次（宮古テレビ記者） 辻本 順子（八重山毎日新聞記者）
取材期間	98年10月30日（金）～11月5日（木）
取材旅行の目的	日本と太平洋島嶼国の相互理解を深めるため、PINAメンバーの受け入れに携わった人々の中から数名を選出し、短期招聘事業で来日したPINAメンバーの国を1ヵ国訪問する。原則として、参加者はメディア関係者とし、訪問先は、その年のPINA総会が開催される国とする。
取材旅行スケジュール	10月30日（金） 関西国際空港から出国 10月31日（土） グアム島泊 グアム大学学長と会合 11月1日（日） ヤップ島へ移動 11月2日（月） ヤップ島東部ガギル地区視察・ピットマング酋長ヘインタビュー マングローブ・ツアー 現地メディア主催の歓迎夕食会 11月3日（火） ピンセント・フィギール州知事表敬訪問 ヤップ・アート・ギャラリー・スタジオ訪問 ヤップ公立高校訪問 Kingtext縫製工場視察 11月4日（水） 自由取材 グアム島へ移動 11月5日（木） グアム島内視察 帰国

「宮古新報」1998年(平成10年)11月11日(水曜日)
掲載記事

石貨の伝統が生きる島
ミクロネシア連邦ヤップ島
今なお残る習慣と風俗
“真の独立”の岐路に

笹川平和財団・太平洋島しょ国メディア招へい事業

笹川平和財団の太平洋島しょ国メディア関係者招聘事業が10月30日から11月6日まで、ミクロネシア連邦ヤップ州で行われた。先島地区から宮古新報、宮古テレビ、八重山毎日新聞が参加し、ピンセント・フィギール州知事へのインタビューをはじめ文化や生活、社会情勢を取材した。ヤップは現在でも石貨(ストーンマネー)が使われ、酋長の権限が存在するなどミクロネシアの中でも最も伝統的習慣と風俗を色濃く残している。その一方で米国による財政援助の期限切れが迫り、経済的な自立が求められている。米国の国連信託統治から独立して12年、美しい自然と伝統文化の島が抱える問題は、沖縄、宮古との共通点も多い。

ヤップ島は赤道に近い西太平洋、フィリピン東方に位置し、約1,000キロにわたって100以上の離島がある。その一つサタウル島は優れた航海技術を持ち、カヌーで3千キロの海を乗り越えて沖縄海洋博に参加した。スペイン、ドイツ、日本、米国の統治を経て、1986年ミクロネシア連邦の一員として独立した。

総面積101平方キロ、人口1万1千人(95年)。州都コロニアは入江に面した閑静な街で、二階建て以上の建物はほとんど無く、住宅も密集していない。郊外に出るとヤシの林立するジャングルの中に集落が点在している。すべての土地が私有地でみだりに立ち入ることが禁じられており、釣りや果実の採取も所有者の許可が必要である。

宮古と同様に大きな河川がないため海の透明度は抜群で、陸との境界には広大なマングローブが広がるなど豊かな自然を有している。植物相もヤラブやギンネム、ホウオウボク、アダンなど宮古と似ている。緑豊かな低地に対し、高地は低木しか生えず、所々に赤土が露出するハゲ山となっている。だがウツボカズラのような珍しい食虫植物が自生している。

ヤップを有名にしているのが石貨で、家の軒先や集落内など至る所で無造作に置かれている。大きさは様々で高さ2.5メートル、厚さ30センチの巨大なもの

もある。材料になる石はヤップに近く、400キロ離れたパラオなど他の島で作られ、カヌーで命懸けで運んだという。

石貨は集落の儀式、婚礼、家屋の建築、トラブルの解決など広範にわたって使われる。移動せずに持ち主だけ変わることもある。一般的な消費生活では米ドルが使われるが、石貨には「富の象徴」の役割がある。大きさや材質で価値が決まるのではなく、その石貨が持つ歴史や物語が価値になる。

もう一つヤップを象徴する伝統習慣としてトップレスがある。腰巻のみの上半身裸で、近年は少なくなったものの、ミクロネシアでもこの民族衣装が日常生活で残っているのはヤップだけだという。また伝統的な木造建築の男性集会(メンズハウス)も各集落にあり、儀式的伝承や共同作業、コミュニケーションの場となっている。

さらに特別な権威を持つ酋長も各村にいる。独立後、公職選挙法が施行されて州知事と州議員は公選しているが、村の酋長公選に関しては島の中心にあるルール村を除いたすべての村が酋長制を存続させた。酋長会議には州の政府や議会の決定をも覆す強い権限があるという。

こうした島の伝統を保持する教育には熱心で、小学校では伝統的な生活様式やヤップ語(公用語は英語)を教える教科書を使っている。教科書は州教育省に委託されたヤップアートスタジオが行っており、米国人画家の指導のもと現地の若者たちが取り組んでいる。

産業の中心は農漁業だが自給自足を目的としており、輸出するほどの生産量はない。近年、食生活の変化から食料は輸入超過となり、自給率は低下している。外国資本の縫製工場や水産加工場はあるが、地元への経済効果は薄い。また最近ではマリレジャーなど観光産業も増えつつあるが規模は小さい。

ミクロネシアは独立の際、米国と締結した自由連合協定に基づき15年間の財政援助を受けている。その間に社会資本を整備して経済的に自立する計画だったが、現実には程遠い状況で連邦政府は延長を申請している。

これについてフィギール州知事は「援助は重要な意味を持たない」と述べ、ヤップの自立と独立の方向性を課題に挙げる。物質文明と貨幣経済の浸透で自立経済の必要性は認めつつも、「ヤップが西洋のように考える必要はない。自給自足できれば世界経済の影響もない」と語る。伝統を重んじながら、独自の経済自立を目指すのは「大きな挑戦」と認識するフィギール知事。ヤップは「真の独立」への岐路に立っているのかもしれない。

「宮古新報」が1998年(平成10年)11月13日から同月18日にかけて5回にわたり連載した「石貨の値 ャップ島を訪れて」と題する 同紙川浦克彦記者による記事

[1998年(平成10年)11月13日(金曜日)付]

“失われた時”の島

ミクロネシア連邦ヤップ島。西太平洋に位置し、人口は1万1千人余。古くからの習慣と風俗が今なお色濃く残っている。日本や米国の統治を経て1986年に独立したが、離島ゆえの経済自立の困難など問題も抱えている。美しい自然に囲まれ、特有の価値観と文化を持ったヤップをシリーズで紹介する。

ヤップの伝統的習慣を最も象徴するのが石貨だ。集落や屋敷内など島の至る所に無造作に置かれている。現在でも儀式や婚礼、家屋の建築、トラブルの解決など広範に使われ、専用の銀行もある。高さ2メートルを超える巨大なものから数十センチまであり、材質も様々だ。

材料となる石はヤップになく、400キロも海を隔てたパラオなど他の島で採っていた。現地で貝斧で削って加工し、カヌーの船体にくくり付けて運ぶ命懸けの仕事だった。

石貨の価値はそれ自体が持つ歴史や物語で決まる。文字を持たなかったヤップの人々は、それを何百年も語り継いできた。だが、その物語の多くを語ろうとはしない。語れば価値が失われてしまうのだという。もう一つヤップの伝統を代表するものとして男性集会所(メンズハウス)がある。ニツパヤシを葺いた伝統的な木造建築物で風格を感じる。文字通り男性専用のため女性は入ることも許されない。伝統文化や儀式の伝承、共同作業、コミュニケーションとなり、漁師の待機場でもあるため必ず海辺に建てられる。男性たちはここで集落の規律やタブー、伝統行事を教わり守り続けている。

その規律の中心が酋長である。独立の際、村長の公選制を住民に選択させたが、ルールという村を除いてすべてが酋長の存続を選んだ。酋長会議を組織し、州の政府や議会の決定をも覆えす権限を持つ超法規的な存在だ。その一方で身分階級も続いており、特に離島民はヤップでの立身が困難だという。

伝統という訳ではないが、男女問わずピンロウジ(アレカヤシの実)を好む。嗜好品の一種で石灰をかけてガムのように噛むと、口の中が血を流したように真っ赤になる。味は痺れるほど辛く、慣れない人にはまったくダメ。東南アジアやインドでも嗜まれるが、ヤップの人は「これが無ければ何も始まらない」というほど大好きである。

男性はヤシの葉で編んだハンドバッグをいつも大事そうに抱え、気が付けば中のピンロウジを取り出して石灰をかけている。行動の節目には必ずと言っていいほど噛む。赤道近くの強い日差しの下で暮らす彼等にとってピンロウジの刺激は欠かせないのだろう。

また花のレイを作って人に贈るが、ヤップの人にとって美しい花とは香りの良いものを指す。ふだんから月桃に似た植物の葉や甘酸っぱい匂いの実を首に付けるなど香りを好む。植物の香りには覚醒やリラックスなど様々な効果があり、アロマセラピーに用いられるが、そうした香りの本質を知っているのかもしれない。

州都コロニアは入江に面した小さな街で、二階建て以上の建物はほとんどない。路上に人の姿もまばらで、ときおり上半身裸で腰巻を着けたおばさんたちが談笑しながら歩いている。のんびりと暮らすヤップの人は「勤労」を美德と考えないところがあるという。物質文明や貨幣経済が進んでも、現金への執着は薄いらしい。

石貨に代表される伝統的な生活を固持するヤップには、失われた時代の面影が残っているようだ。

[1998年(平成10年)11月14日(土曜日)付]

ヤップと日本語

「コンニチワ」。しばしば年配のヤップ人からそう声をかけられる。太平洋戦争まで日本に統治されていたためだが、現在でも意外と多くの所で日本語に出会える。

ヤップの近代は他国による支配の歴史だった。19世紀末にスペイン、次いでドイツ、1914年から30年にわたって日本が国連委任統治領とした。多くの日本人が移住し、農業や漁業などの産業活動を起し、同時に日本語教育も行った。

「戦争のときは兵隊と苦労した。飛行機の音がすると恐ろしくて防空壕に逃げたよ」と振り返るピットマンガさん(80)。ヤップ島東部のガギル地区にある村の酋長で、当時は教師として地元の子供に日本語を教えていた。ヤップも連日のように空襲にさらされた。沖縄戦が始まると攻撃は弱まり、地上戦は免れたという。

戦争が終わると日本人は引き揚げたが、言葉は置いていかれた。「ジャンケン」「テンブラ」「カッソーロ」などの日本語が今も外来語として使われている。11月3日の独立記念日のイベントは「ウンドウカイ」で、陸上競技大会が行われていた。村ごとにテントを張って応援する姿は、宮古郡体育大会とまったく同じ光景だった。

街を歩けば多くの「日本」と接する機会がある。商店には米国や韓国の製品に混ざって日本製の缶詰やインスタントラーメンなども目立つ。乗用車はほとんど日本製だ。レストランには日本語のメニューがあり、運が良ければ「サシミ」も食べられる。

日本人観光客も多く、数十人の団体でダイビングを楽しむ若者や釣客、年配夫婦までと様々だ。日本人が経営するホテルもあり、オーナーは「どんどん観光客を呼びたい」と張り切っていた。

日本の統治が終わると次は米国領となった。ピットマングさんは米国本土に留学して英語を学び、子供たちに教えた。日米の統治の違いを「日本は『遅れているからこれをやりなさい』だった。米国は島民の意見を聞いてくれた」と話す。日本は同化政策をとり、米国は地元の意思を尊重した。

米国も英語教育に力を入れた。小学校から高校まで学費を無償にし、大学も各種援助でほぼ無償で入学できた。しかし経済振興が伴わなかった。卒業して島に帰っても大学で学んだ知識を生かす職場は少なく、行き場を失って自殺する若者が多発しているという。物質社会と伝統文化の構造的矛盾に耐え切れなかったようだ。

ヤップは他国に翻弄（ほんろう）され続けた。ピットマングさんは米国式の教育を受けた若者が村を省みないことに苛立ちを感じていた。「他国の人が代わるがわる来て私達を治めた」と拒否感を露にし、「文化は変わらない。ヤップのことはヤップが考える。決して日本人にも米国人にもなりたくない。ヤップ人でいたい」と語っていた。

[1998年(平成10年)11月15日(日曜日)付]

教科書をつくる若者

3人のヤップの王が聖母マリアに抱かれたイエス・キリストを祝う図が描かれたクリスマスカード。トミー・タマングメッドさん(23)は自ら手がけた最初の仕事を誇らしげに説明した。王たちは石貨、貝貨、ココナッツとヤップ伝統の贈り物で神の子の誕生を祝福していた。

トミーさんが働く「ヤップアートスタジオ」は各地から集めた民芸品などを売る一方で、州教育省の委託を受けて小学校の教科書を制作している。米国人画家のルース・リトルさんが、各地から選ばれた絵画の素質のある若者を指導している。トミーさんはルースさんの一番弟子だった。「最初はどの描けば良いかわからなかった。仕事はとても好きだ。働きながら勉強している」とやりがいを感じているようだ。

「彼が成功したので他の地区からも呼ぶことにした」とルースさん。来島して5年になる。スタジオではヤップ本島やサタワルなど離島の4つの言語で教科書を作っており、8人の若者が挿絵などを描いている。

州政府は伝統文化の教育に力を注いでいる。教科書は基本的に低学年向けで童話や民話をはじめ、カヌーの乗り方や料理方法、食べられる木の実など生活に係わることも取り上げている。ルースさんは「テクノロ

ジーもよいが同時に伝統文化や村での生活、言語を維持することも大切」と話していた。

ヤップには本島と離島に一校ずつ公立高校がある。本島のヤップハイスクールは生徒数500人、12歳から30歳までが通う。商業、工業、農業、機械などの技術訓練コースがあり、米国から導入されたミクロネシア市民教育(政治や行政など)やコンピュータ教育も行っている。日本語の授業もあり、大橋旦さんという老人が教鞭をとっている。

伝統文化の教育は小学校と違い、習慣の違う各地域の子供が集まるため難しいという。だがホームルームで伝統文化に関わるモラルの討論や、それぞれの地域の服装で登校する日を設けるなど課外活動で取り組んでいる。

同校の進学率は約30%、あとは地元の少ない就職機会を探すか海外へ出稼ぎに行く。ヤップの人口構成は20代以下が半数以上を占めるが、若者の雇用の場は絶対的に不足している。だが学校現場は教師が足りず、同校では将来ヤップに帰って教師になるという条件で進学させる。島を担う人材の育成が求められている。トミーさんのクリスマスカードは、ヤップの立場を象徴しているようにも見えた。伝統文化を幼い次世代に伝える仕事について「伝統を知るのは好きだ。まだ断片的にしか分らないが、いずれ多くのことを学んで子供たちに教えたい」と目を輝かせていた。

[1998年(平成10年)11月17日(火曜日)付]

美しい“自然”の島

ヤップと沖縄の植物相はよく似ている。ヤラブやアダグン、ギンネム、ハウオウボクなど見慣れた樹木にホッとさせられる。ニッパヤシを葺いた家など木造建築が多く、木は人々の生活と密接に関わっている。

また沖縄に生息するチョウも見られる。特にリュウキュウムラサキが多い。羽根に輝く藍色の模様を持ち、「リュウキュウ」の和名に反して日本では台風や季節風に乗って飛来する迷蝶だ。飛来地で一時的に繁殖するが、冬になると寒さのため死んでしまう。

東南アジアからオーストラリア北部まで広い範囲に分布し、地域による亜種が多い。オスの模様はほぼ同じだが、メスは羽根の模様でどの地域の亜種か区別できる。ヤップで見られるのはパラオ型(沖縄は台湾型やフィリピン型)と思われ、ジャワ型と同じく前翅にオレンジ色の斑紋があり、いかにも南方種という感じである。この亜種は宮古島でも稀に見られる。

移動性が強いせいか飛来地での混血も進んでおり、メスは親の出身地の名残を羽根の模様止める。熱帯の島々を飛び交うリュウキュウムラサキは、かつて大海原をカヌーで自由に航海したヤップ人ら海洋民族を思い起こさせる。



見てきた西太平洋のヤップ島



「お金ですべてでない」
伝統的な暮らし次世代へ



ヤップ島の伝統的な暮らし



ヤップ島の伝統的な暮らし



ヤップ島の伝統的な暮らし

ヤップ島の伝統的な暮らし

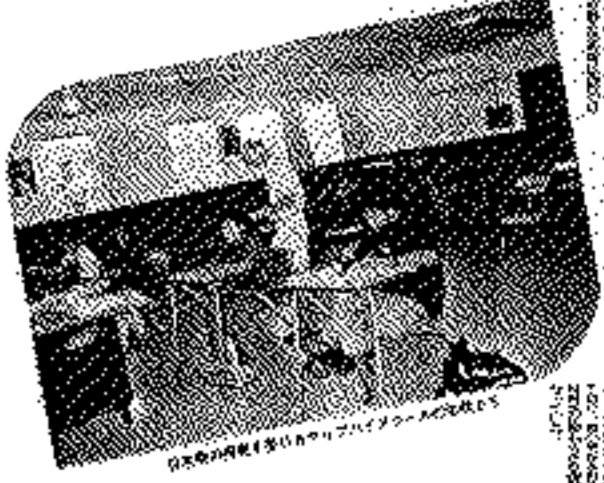
ヤップ島の伝統的な暮らし

ヤップ島の伝統的な暮らし

ヤップ島の伝統的な暮らし

ヤップ島の伝統的な暮らし

地球にいちばんやさしい島



ヤップ島の伝統的な暮らし

ヤップ島の伝統的な暮らし

ヤップ島の伝統的な暮らし

アメリカは島の意見聞き 資金援助、日本は強制的

ビットワンク・ワイルド林悦良



ヤップ島の伝統的な暮らし

アメリカは島の意見聞き 資金援助、日本は強制的



ヤップ島の伝統的な暮らし

ヤップ島の伝統的な暮らし



ヤップ島の伝統的な暮らし

ヤップ島の伝統的な暮らし

かつて日本が30年間統治

無防備な島に押し寄せる文明の波

ヤップ島取材旅行に参加した「八重山毎日新聞」辻本順子記者のヤップ島紹介記事。1999年元旦の「八重山毎日新聞」が見開き2ページにわたり掲載した。

ヤップの豊かな自然は人々の食生活も支えてきた。農業は基本的に自給が目的のため、ほとんど家庭菜園並みの規模で経済ベースの生産はしない。ちょっとした畝を作りタロイモや野菜を栽培しているが、周囲にはヤシやバナナ、パパイアなどの食用植物が無造作に自生しており、食べるのには困らない。自給に頼った生活は不安定に思えるが、自然は気前よく食料を与えてくれるようだ。

村社会の伝統として何でも公平に分配する習慣があるという。島内の土地にはすべて所有者がいて、譲渡の代価は石貨が使われる。土地にはヤシや畑などが付いており、村人全員が自給できるようになっている。

だが海外から加工食品が輸入されるようになり、ヤップの食生活は大きく変わってしまった。魚や肉の缶詰、インスタントラーメンがご馳走になり、人々の味覚も従来の郷土食より輸入品に傾いている。栄養価の低い加工食品の浸透は健康にも影響を与えており、栄養失調による死産の増加など深刻な問題となりつつある。

ヤップの海は宮古と同じかそれ以上に美しい。大きな河川がないため透明度は抜群だ。4つの島が寄り添って内海を形成し、陸との境にはマングローブが広がる。河口など海水と淡水が混じり合う汽水域に発達するため、豊富な水源の存在を感じさせる。マングローブは複雑な樹形によって数多くの生物に住みかを与えているため「生命のゆりかご」と呼ばれ、豊かな自然の証となっている。

海岸にコンクリートの護岸などなく、アスファルト舗装の道路も少ないヤップの美しさは、開発されていない手つかずの自然にある。外界の文明が次々と押し寄せるなか、ヤップは美しいままでいられるのだろうか。

[1998年(平成10年)11月18日(水曜日)付]

“独立”することの価値

「援助は重要な意味を持たない」と語るビンセント・フィギール知事。大切なのはヤップがどうやって「独立を果たすか」にあるという。

1986年11月3日、ヤップ州はミクロネシア連邦の一員として独立した。その際に米国と締結した自由連合協定に基づき、15年間の財政援助を受けている。総額は1億5千万ドル以上。年間予算の約70%を占める。期間中に社会資本を整備して経済的に自立する計画だったが、現実ほど遠い状況で連邦政府は延長を申請している。

協定の見返りは軍事利用だった。冷戦時代、環太平洋の戦略的な重要性は高まった。基地こそないが、安全保障及び防衛関係の条項には軍用地の提供や第三国の介入排除、核兵器持ち込みが示されている。

この十数年間、ヤップも経済自立に向けた様々な取り組みが行われてきた。農産物販売や観光、建設などを多角的に経営した民間企業はノウハウや技術の不足、何よりも市場がないため失敗した。また缶詰工場の計画もあったが商業ベースの原料確保が困難で、缶も海外から調達しなければならずコスト高となるため挫折した。

現在、産業と呼べるものはない。台湾人資本による縫製工場があり、対米特惠を利用して順調に実績を伸ばしているが、従業員の大半は中国人で地場経済への波及効果はほとんどないという。

食料品を中心にした大幅な輸入超過の現状に、フィギール知事は自給率向上のためにも経済振興は必要としている。第1の振興策に漁業を挙げるが、輸送体制の基盤整備や市場開拓など課題は多い。観光業は換金性が高く島民も関心を示しており、農業と関連させた振興を考えている。だが「固有の文化が客を魅了しているが、ゴムやサイパンのような開発はしたくない」と述べ、注意深く対応すべきとしている。

ミクロネシア連邦の中でも多くの伝統的習慣が人々の生活に息づくヤップで、物質文明や貨幣経済は拒否反応を引き起こすケースがある。高学歴の若者の自殺、加工食品による栄養失調はその象徴と言えるだろう。

フィギール知事は伝統的な暮らし、生き方を次世代に残すべきだと強調する。「若者は村の生活スタイルにそぐわない勉強をしている。ヤップに住むかぎりヤップの伝統を守らなければ生きていけない。自分の食べる農作物や魚を採ること、価値観を教えることが重要だ」と語る。

かつてヤップ初代の民選知事ジョージ・マンゲッフェルは就任式に上半身裸と腰巻の伝統装束で臨み、スーツにネクタイをしめた米国などからの来賓の前に、「諸外国の影響に押し流されてはならない。先祖から受け継いだ文化と伝統を守り、我々に最も合った方法で国づくりを進めよう」と演説した。

伝統を重んじながら経済自立を図ることは「大きな挑戦」とフィギール知事は認識している。「ヤップが西洋のように『金がすべて』と考える必要はない。自給自足できれば世界経済の影響も及ばない」。伝統と経済の狭間で真の独立への岐路に立たされているが、民族のアイデンティティを失ってまで独立しても意味がないというのだろう。

フィギール知事は石貨について「何ドルするかは人によって違うことを言うだろう。だがこれで1千万ドルのことも解決できる」とピンロウジで真っ赤になった口で言った。石貨の価値はヤップ人にしか押し量れない。

(おわり)

過去の招聘事業

第1回招聘事業（1991年）

招聘

招聘者

国名

Terry M Gamabruw, Ms. (テリー・ガマブル) 大統領付情報局(特別アシスタント)	ミクロネシア連邦
Shirley Joy, Ms. (シャーリー・ジョイ) バヌアツ・ウィークリー・ヘッドモデル(編集者)	バヌアツ共和国
Sano Malifa, Mr. (サノ・マリファ) サモア・オブザーバー(編集長)	西サモア
Luke Sela Obe, Mr. (ルク・セラ) ポスト・クーリエ(編集長)	パプアニューギニア
Sione Tu'itahi, Mr. (シオーネ・トゥイタヒ) トンガ・クロニクル(副編集長)	トンガ王国
Ngaueta Uatiao, Mr. (ンガウエア・ウアティオア) テ・ウケラ(編集長)	キリバス共和国

行程

6月16日(日)	成田着	成田到着後、ホテルへ
6月17日(月)	東京	笹川平和財団訪問 ソニー・メディア・ワールド見学 フォーリン・プレスセンター訪問 歓迎パーティー
6月18日(火)	東京	外務省訪問 JICA訪問 NHK衛星放送視察 ハトバス歌舞伎ガイドツアー
6月19日(水)	東京	読売新聞社見学 アジア太平洋国会議員連合表敬訪問
6月20日(木)	大阪着 大阪 神戸 広島着	国立民族学博物館訪問 園田学園訪問
6月21日(金)	広島	平和公園見学 広島市長表敬訪問 中国新聞社訪問 マツダ自動車工場見学
6月22日(土)	京都着 京都	京都見学
6月23日(日)	東京着	自由取材(浅草、アメ横)
6月24日(月)	東京 成田発	フリー

第2回招聘事業(1992年)

招聘

招聘者

国名

Gary Barnard Johnston, Mr. (ゲイリー・バーナード・ジョンストン) トンガ・クロニクル(編集者)	トンガ王国
Oseah Philemon, Mr. (オセア・フィレモン) ポスト・クーリエ(編集長)	パプアニューギニア
Natani Vakacegu Rika, Mr. (ネタニ・バカセグ・リカ) フィジー・タイムス(編集者)	フィジー共和国
Alex James Sword, Mr. (アレックス・ジェームス・スオード) クック・アイランド・ニュース(編集長)	クック諸島
Imo Taasi, Mr. (イモ・ターシ) ソロモン・スター紙(チーフレポーター)	ソロモン諸島

行程

9月13日(日)	成田着	成田到着後、ホテルへ
9月14日(月)	東京	笹川平和財団訪問 ソニー・メディア・ワールド見学 フォーリン・プレスセンター訪問 歓迎パーティー
9月15日(火)	東京	船の科学館見学 フリー ハトバス東京ガイドツアー
9月16日(水)	東京	JICA東京研修所見学 環境庁および環境情報センター訪問
9月17日(木)	京都着 京都	京都見学 フリー
9月18日(金)	広島着	平和公園見学 広島市長表敬訪問 中国新聞社訪問
9月19日(土)	広島	広島水産振興センター 宮島見学 広島日本青年国際交流機構 歓迎会
9月20日(日)	東京着	フリー
9月21日(月)	東京	フリー 笹川平和記念会館訪問 日本船舶振興会 笹川陽平理事長表敬訪問
	成田発	

第3回招聘事業（1994年）

招聘

招聘者

招聘者	国名
Monica Miller, Ms. (モニカ・ミラー) PINA会長 / 特派員 / ジャーナリズム教師	米領サモア
Leota Uelese Petaia, Mr. (レオタ・ウエレセ・ペタイア) PINA副会長 / PEVA製作所 (マネージング・ダイレクター)	西サモア
Tavake Fusimalohi, Mr. (タバケ・フシマロヒ) PINA実行委員長 / ラジオ・トンガ (ジェネラル・マネージャー)	トンガ王国
Nina Ratulele, Ms. (ニナ・ラトゥレレ) PINAニュース (編集者) / フィジー・メディア協会 (事務局長)	フィジー共和国
Peter Lomas, Mr. (ピーター・ロマス) フィジー・メディア協会 (トレーニング・コーディネーター) / パシフィック・アイランド・ビジネス編集長	フィジー共和国
Alfred Sasako, Mr. (アルフレッド・ササコ) 南太平洋フォーラム事務局 (広報情報局員)	ソロモン諸島
Sinclair Solomon, Mr. (シンクレア・ソロモン) ナショナル (特別編集者)	バブアニューギニア
Fay Duega, Ms. (フェイ・ダグラス) PNGビジネス (編集長代理)	バブアニューギニア
Tibwere Bobo, Mr. (ティウェル・ボボ) テ・ウケラ (チーフサブ編集者)	キリバス共和国
Claudia David, Ms. (クラウディア・ディビッド) ミクロネシア・ヴォイス新聞 (アシスタント編集者)	ミクロネシア連邦

行程

10月24日(月)	東京	オリエンテーション 交流プログラム (国際協力事業団、海外漁業協力財団、南太平洋経済交流協会)
10月25日(火)	横浜 東京	新幹線体験乗車 横浜中華街見学 共同通信社・東京証券取引所見学 早稲田大学キャンパス見学・社会科学研究所と意見交換
10月26日(水)	東京	フリー (浅草雷門・ショッピング) 警視庁見学 (交通管制システム・その他) フォーリン・プレスセンター訪問 NHK見学 歓迎レセプション
10月27日(木)	東京 奄美大島着	築地市場見学 笠利町役場・笠利町内学校訪問 ウエルカムパーティー
10月28日(金)	奄美大島	笠利町歴史民俗資料館・農園見学 大島紬泥染体験・紬工場視察・奄美博物館見学 南海日日新聞社見学 2班に分かれて別行動 1) 天然記念物「奄美黒うさぎ」観察ツアー 2) 奄美式石焼き料理体験
10月29日(土)	奄美大島	マングローブ視察 リュウキュウアユと魚の生息する河川工法を視察 半潜水艇によるサンゴ礁観察 名瀬市商店街散策・ショッピング さよならパーティー
10月30日(日)	奄美大島 東京着	班別行動 1) 徳之島訪問 2) 奄美テレビ訪問 3) 農場視察 4) 市内視察
10月31日(月)	東京 成田発	プログラム評価検討会 国会見学・参議院会館にて懇談

派遣事業

訪問地

フィジー / サモア

時期

1994年6月

参加者

松井輝美 (南海日日新聞・編集長)
奥 篤次 (ばしゃ山・代表取締役)
中山清美 (笠利町歴史民俗資料館)

第4回招聘事業（1995年）

招聘

招聘者	国名
Anna Solomon, Ms. (アンナ・ソロモン) ワールド・パブリッシュ(チーフ・エディター)	バブアニューギニア
Laisa Taga, Ms. (ライサ・タンガ) デイリー・ポスト(マネージング・エディター)	フィジー共和国
Lisa Williams, Ms. (リサ・ウィリアム) クックアイランド・ニュース(ビジネス編集者)	クック諸島
Jean Malifa, Ms. (ジーン・マリファ) サモア・オブザーバー(局長)	西サモア
Nanise Fifita, Ms. (ナニセ・フィフィタ) ラジオ・トンガ(シニア・ジャーナリスト)	トンガ王国
Jone Moceacagi, Mr. (ジョン・モセアカイ) ラジオ・フィジー(チーフサブ編集者)	フィジー共和国
Richard Broadbridge, Mr. (リチャード・ブロードブリッジ) フィジー・ワン・テレビジョン(ジャーナリスト)	フィジー共和国
Vijay Chand, Mr. (ヴィジエイ・チャン) 北部代表 ラジオ・印刷部(政府情報局)	フィジー共和国
Kanawi Dononura, Mr. (カナウィ・ドノヌラ) ナウFM(プロデューサー)	バブアニューギニア
Nina Ratulele, Ms. (ニナ・ラトゥレレ) PINA事務局(コーディネーター)	フィジー共和国

行程

11月6日(月)	東京	ウエルカムパーティー
11月7日(火)	東京	オリエンテーション 都庁見学 山岡ゼミと討論会 ゲスト：島田興生先生 フリー
11月8日(水)	東京	班別行動 1) 鎌倉FM訪問および鎌倉・横浜見学のち新幹線体験乗車 2) 江戸博物館見学および西日暮里・上野・浅草散策 New Concept Forum 懇談会
11月9日(木)	石垣島着	歓迎会 表敬訪問(八重山支庁、石垣市役所、竹富町役場、八重山日報、中央放送、石垣ケーブルテレビ、他)
11月10日(金)	石垣島	説明会・夕食懇談会 石垣島視察(国際農林水産研究所、栽培漁業センター、県水産試験場、石垣島製糖工場、他)
11月11日(土)	竹富島 西表島 石垣島	竹富島視察 西表島視察 さよならパーティー(市長挨拶、支庁長挨拶)
11月12日(日)	石垣島 東京着	フリー
11月13日(月)	東京	フリー プログラム評価検討会
	成田発	

派遣事業

訪問地	フィジー
時期	1995年12月15日～11日
参加者	友寄英正(石垣ケーブルテレビ・報道制作課部長) 山里節子(八重山諸島環境保護活動家) 高槻義隆(南海日日新聞・記者) 大西律江(早稲田大学商学部・学生) 露木麻理子(中央大学理工学部・学生)

第5回招聘事業(1996年)

招聘

招聘者	国名
John Lamani, Mr. (ジョン・ラマニ) ソロモン・スター紙(社主兼エディター)	ホニアラ/ソロモン諸島
Shazia Munaf, Ms. (シャジア・ムナフ) インデペンデント・ラジオ・ニュース放送(シニア・リポーター)	スバ/フィジー共和国
PaulaTaufa, Mr. (パウラ・タウファ) オフア・キ・トンガ紙(アシスタント・エディター)	ヌクアロファ/トンガ王国
PilimisoloTamo'ua, Mr. (ピリミソロ・タモウア) トンガ・クロニクル紙(アシスタント・エディター)	ヌクアロファ/トンガ王国
Robyn Sela, Ms. (ロビン・セラ) ナウFM放送(ニュース・エディター)	ポートモレスビー/パプアニューギニア
Lewis Wolman, Mr. (ルイス・ウォルマン) サモア・ニュース紙(社主兼エディター)	パゴパゴ/米領サモア
Filimore Timothy, Mr. (フィリモア・ティモシー) V6AJ ラジオ放送(番組エディター)	コスラエ/ミクロネシア連邦
Patrick Lino, Mr. (パトリック・リノ) ブロードキャスティング・コーポレーション・オブ・ニウエ(番組エディター)	アロフィ/ニウエ
Luseane Luani, Ms. (ルセアネ・ルアニ) ラジオ・トンガ放送(チーフ・リポーター)	トンガ王国
Nina Ratulele, Ms. (ニナ・ラトゥレレ) PINA(事務局長)/PINA Nius(エディター)	スバ/フィジー共和国

行程

6月24日(月)	成田着	成田到着後、ホテルへ
6月25日(火)	鎌倉	鎌倉ケーブルコミュニケーションズ見学 神奈川メディアセンター見学 鎌倉シネマワールド見学 ウエルカムパーティー
6月26日(水)	鎌倉	鎌倉FM訪問・番組出演 鎌倉市役所表敬訪問 藤沢FMレディオ湘南見学
6月27日(木)	宮古島着	歓迎夕食パーティー
6月28日(金)	宮古島	宮古島視察(平良市役所、風力発電所、太陽光発電太陽熱発電所、福里地下ダム 工事現場など)
6月29日(土)	宮古島	宮古記者クラブとの交流会 自由取材 フォーラム 班別行動
6月30日(日)	宮古島	1) 一般家庭訪問 宮古島泊 2) 一般家庭訪問 伊良部島泊 班別行動 1) 宮古島にて自由取材 2) 伊良部島にて漁業取材 サニツ浜カーニバル プログラム評価会議 さよならパーティー
7月1日(月)	東京着 成田発	

派遣事業

訪問地	トンガ
時期	1996年8月1日～9日
参加者	下地一雄(宮古テレビ・カメラマン) 比嘉盛友(八重山毎日新聞・記者) 池間 康(宮古新報・記者) 亀和田俊明(鎌倉FM放送・プロデューサー)

第6回招聘事業（1997年）

長期招聘プログラム

招聘者

Oseah Philemon, Mr. (オセア・フィレモン)
ポスト・クーリエ (編集局長)

国名

パプアニューギニア

行程

9月16日(火) 国際協力事業団神奈川国際水産研修センターにて養殖一般を学習中のピーター・ミニムル氏 (パプアニューギニア調査保護協会調整官) ヘインタビュー
 9月17日(水) 国際機関太平洋諸島センター (南太平洋経済交流支援センター) の小滝義昭所長ヘインタビュー
 アイワ・オルミ駐日パプアニューギニア大使ヘインタビュー
 9月18日(木) 三菱マテリアル (株) 直島製錬所 (香川県) 見学および原芳彦副所長ヘインタビュー
 9月19日(金) 三菱マテリアル (株) 堺工場 (大阪府) 見学
 9月20日(土) 築地魚市場見学
 9月22日(月) 依忠彦BHP Japan副社長 (非鉄金属マーケティング担当) ヘインタビュー
 9月24日(水) 東京大学大塚柳太郎教授 (人類生態学) ヘインタビュー
 9月26日(金) パプアニューギニアからワニ皮を輸入している堀内貿易 (株) の竹原洋一取締役社長ヘインタビュー、ワニ皮なめし工場の (株) 協染を見学、ワニ革ハンドバッグメーカーの (株) サンバッグ坂本を訪問
 9月27日(土)~28日(日) 佐渡訪問
 9月29日(月) 外務省欧亜局大洋州課によるブリーフィング (近く東京で開催される日・南太平洋フォーラム首脳会議について)
 9月30日(火) 米作農家訪問 (栃木県) 稲刈り体験

短期招聘プログラム

招聘者

Len Garae, Mr. (レン・ガラエ)
バヌアツ・トレーディングポスト (記者) / バヌアツ記者クラブ (会長)
 Evelyne Toa, Ms. (エーヴリン・トア)
ラジオ・バヌアツ (報道部長)
 Simeon Robert, Mr. (シミオン・ロバーツ)
バヌアツ・ウィークリーエブドマデル (編集次長)

国名

バヌアツ
 バヌアツ
 バヌアツ

行程

9月29日(月) 来日
 9月30日(火) 栃木県 米作農家訪問 (稲刈り体験)
 東京 レセプション (日本記者クラブ)
 10月1日(水) 石垣島 八重山記者クラブとの交流会
 10月2日(木) 石垣島 八重山新聞および石垣ケーブルテレビ訪問
 石垣島の高校生との交流会
 10月3日(金) 竹富島 竹富島視察
 10月4日(土) 横浜着
 10月5日(日) 鎌倉 鎌倉FM放送訪問、鎌倉市内観光
 10月6日(月) 鎌倉 神奈川メディアセンター見学

派遣事業

訪問地

バヌアツ

時期

1997年11月30日~12月6日

参加者

友寄英正 (石垣ケーブルテレビ・報道制作課部長)
 照屋秀和 (宮古TV・アナウンサー)
 石垣美紀子 (八重山諸島教育コンサルタント)